

学会ハイライト

第34回日本臨床皮膚外科学会学術大会 学会主催を終えて

(平成28年3月5, 6日, ホテル阪急エキスポパークにて)

爲政 大幾

独立行政法人国立病院機構大阪医療センター皮膚科科長

はじめに

第34回日本臨床皮膚外科学会学術大会は、平成28年3月5, 6日の両日にわたり、大阪府吹田市の万博記念公園内にありますホテル阪急エキスポパークにおきまして開催され、私が大会長を務めさせていただきました。

予想を超える多くの演題応募を全国から得られ、好天にも恵まれたこともあってか、大阪の中心地からやや距離のある会場にもかかわらず、予想を上回る参加者を得て盛会裡に終えることができました。参加いただきました皆様をはじめ、シンポジウムや講演の講師、座長をお務めいただいた先生方、日本臨床皮膚外科学会の理事や評議員および学会運営事務局の皆様、ご支援いただいた同門の先生方や各社のご尽力に大会長として深く感謝申し上げます。

慣れない学会開催を手作りで運営いたしましたため、不行き届きな点多々あり、ご迷惑をおかけしたことかと思われませんが、この場を借りてお詫び申し上げます。

本学術大会のテーマと概要

ご存知のように、学会開催地は1970年に「人類の進歩と調和」(Progress and Harmony for Mankind)をテーマとして日本万国博覧会が開催され、当時の世界最先端の科学技術が展示され世界中から多くの観客を集めた、まさにその場所です。大阪万博以後の科学技術の進歩はめざ



学会受付。

ましく、当時は将来の夢の技術として展示されていたものも、すでに現実となっているものが少なくありません。とくに医学の分野においては、近年の分子生物学上の発見や発明などもあって、当時の予想を遙かに超える進歩を遂げています。しかし、いくら科学技術が進歩しても、その元となる診断や治療の最終的判断はヒトに委ねられており、進歩したがゆえによりいっそう診療能力の充実が求められるようになってきています。

そこで本大会では基本に立ち返りながら、いかに最新の学術的進歩を取り入れ、また異なる分野の技術や知識を調和させながら皮膚外科学の進歩をめざすかということを目的として、「21世紀における皮膚外科の進歩と調和」というテーマを設定いたしました。このテーマにもとづいて、近年とくに注目度の高い創傷治癒、皮膚の色調や質感の変化などの美容面、そして皮膚悪性腫瘍、なかでも悪性黒色腫の新規治療などに関する最新の知識の習得と基本的知識の再確認を目指して、シン



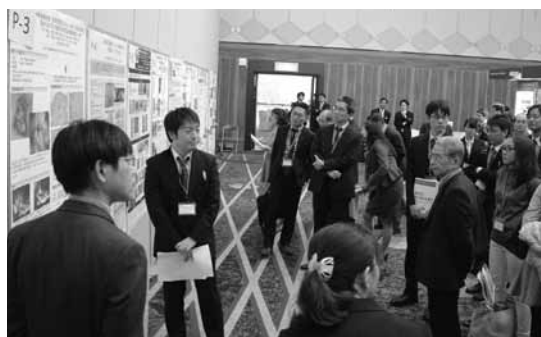
講演会場における発表。

ポジウムや教育講演、セミナーを企画いたしました。

教育講演とスポンサードセミナー

本学会における講演やセミナーを設定するにあたっては、内容を大会長の得意分野に集中してしまうと、「皮膚腫瘍外科学会」になりかねないと危惧いたしました。このため、学会テーマにもとづいて、進歩的かつ各分野の横断的な話題を集めるようにと苦慮いたしました。規模の小さな集会であるため、すべての分野を満遍なく網羅することは不可能ですが、ある程度バランスの取れた内容にできたかと考えております。

教育講演1では、日常診療において頭を悩ませることの多い色素異常(色素沈着、色素脱失)をテーマに設定しました。色素増強(沈着)に関しては、大磯直毅先生(近畿大学皮膚科准教授)に「色素増強症と色が濃くなる母斑」とのタイトルで、色素沈着の基礎的メカニズムから、あまり遭遇しないような珍しい疾患まで、わかりやすくご解説いただきました。大阪大学皮膚科講師の種村篤先生には「色素脱失・白斑」というタイトルで、ロドデノール白斑を中心とした色素脱失に関する最新の知見をご講演いただきました。いずれのご講演も、レーザーや美容に携わる先生方の知識充実に役立つ素晴らしい内容でした。



活発な議論がなされたポスター会場。

教育講演2では、札幌皮膚科クリニック副院長の安部正敏先生をお招きして、「変化する創傷治癒理論」というテーマで、創傷治癒に関する最新の理論と、それをもとにした創傷の取り扱いに関するご講演をいただきました。安部先生の巧みな話術で、この分野になじみのなかった方もどんどん内容に引き入れられていくような、素晴らしくかつわかりやすい講演であり、創傷や褥瘡のみならず、糖尿病性潰瘍などの難治性潰瘍に接する機会の多い皮膚外科医にとって、明日からの実地診療にすぐに役立つ意義深いものでした。

スポンサードセミナーでは、信州大学皮膚科准教授の宇原久先生に「進行期メラノーマの治療 Up-To-Date」として免疫チェックポイント阻害薬を中心とする最新の治療法について、臨床面を中心にお話いただきました。また、東北大学皮膚科助教の藤村卓先生には、最新の基礎的データにもとづいたメラノーマ治療の可能性に関して、インターフェロン β と免疫チェックポイント阻害薬との併用の可能性を中心にご講演をいただきました。いずれも、現在もっともホットな話題であるメラノーマの免疫治療に関して幅広い知識を得られるセミナーとなりました。一方、美容皮膚科的な面では、「しみに対する低出力QスイッチNd:YAGレーザー治療(レーザートーニング)の展望」について上中智香子先生(和歌山県立医科大学寄附講座講師)に、「美容皮膚科領域における機器を使用した顔面たるみ治療」について、本学会理事長でもある秋田浩孝先生(藤田保健衛生大学皮膚



太陽の塔を望む懇親会場。

科准教授)にご講演いただきました。いずれも感覚的な医療と取られがちな美容医療を科学的に捉えていこうと試みられており、今後の美容医療の発展には欠かすことのできない方向性を示唆する有意義な講演でした。

一般講演(一般演題・ポスター演題)

一般演題では、ポスターと合わせて41題もの出題をいただきました。テーマに対するご理解を得られたようで、実に幅広い分野に関する症例報告や臨床研究などについて、最新の話題を含めてご発表いただくことができました。ポスター演題に関しては、前年度大会に引き続き今回も学会誌編集委員による投票によってポスター賞を選定し、下記の先生が受賞されました。

ポスター賞

「当院での壊死性筋膜炎症例の検討」

市立函館市民病院形成外科 南本俊之先生

賞品として、大阪では各家庭に必ず1台あるといわれる家庭用「タコ焼き器」が進呈されましたが、きっと今頃は北海道のおいしいタコを使って、大阪の味をお楽しみいただいていることと信じてお



ポスター賞授賞式。

前回大会会長の山本直人先生(左)よりポスター賞受賞者の南本俊之先生(右)への記念品授与風景。

ります。

おわりに

分子生物学分野をはじめとした近年の医学の進歩は、大阪万博当時の予想を遙かに超えるものがあります。しかし、いくら科学技術が進歩しても、それのもととなる診断や治療は個々の医師の能力によるところが大きく、こういった時代であるからこそ、よりいっそう個人の能力の幅広い充実が求められています。

本学会は皮膚科、形成外科、美容皮膚科、美容外科など、近くて異なるフィールドで活躍されている医師が一堂に集まり、和気藹々としたカジュアルな雰囲気の中、お互いの分野の情報を提示・共有する、クロスオーバーした学会を目指しています。査読システムを有する学会誌として“Skin Surgery”誌を年3回発行するとともに、各種の委員会を立ち上げて、よりアカデミックかつ臨床に役立つ学会になるべく改革の努力を重ねておりますので、今後も本学会へのご参加とより一層のご支援を賜ることができれば幸いです。